

第4回 ベンチャー支援は社会貢献度が高いのか

ベンチャービジネスを興して、千三つ以上といわれる中から勝ち残って成功する起業家に対して畏敬の念を抱かない人はいないだろう。ソフトバンクの孫正義会長、楽天の三木谷浩史社長など、面識はないがみていて目映いばかりである。我々、経営支援者にとって、そういったカリスマ的な起業家と出会って、いろいろと協働できることほどエキサイティングなことはないと思う。

しかし、それは実際のところ幻想であって、本当にビッグなビジネスを志向してそれに邁進している実力派の起業家、経営者は、その辺の中小企業診断士など相手にしない。それに、中小企業診断士とセットになっている公的支援などあてにしていないのだ。第一、公的支援を十二分に受けて成功したというベンチャー企業を私は知らないし、そんなことはあり得ないことだと考えている。

ベンチャー企業の支援ということでは、行政機関がベンチャー企業を支援すること自体、どうかと思うし、やっても意味がないと私は考えている。そもそも、ベンチャービジネスをやるということ自体、役所の仕組みとは全く相容れないものだし、もっといえば、ベンチャー企業や起業家というものは、その新奇性ということにおいて、あるいは創造的破壊ということにおいて、既存の概念を否定することからビジネスの端緒を創出するものだ。当然、既存概念の固まりのような役所を否定することになる。自分を否定する者に対して何故力ネを出してまで支援するのか、私にはちょっと理解できない。

ベンチャー企業は、公的な支援を必要とするものではない。中小企業診断士の経営支援も場合によっては不必要である。徒手空拳でやってこそ、ベンチャーであり、成功したときのビッグな果実は、リスクをとって努力した者に帰するものだ。わかりやすい表現をすると、「ベンチャー企業は、曠野（こうや）でこそ育つ」ということに尽きる。

さらに、診断士サイドからいうと、ベンチャー企業というのは、ユニクロとかごく一部の企業を除いて、殆どが雇用のボリュームを伴わないもので、その点で社会貢献度とか地域貢献度が著しく低い。中小企業診断士が社会貢献型の経営支援専門家だとしたら、そういうベンチャー企業の支援は、事業ドメインには入ってこないのである。だから私は、2年前にベンチャー支援を基本的にやめた。今は、本当に価値観の通じ合う起業家やベンチャー経営者をボランティアベースで支援することになっている。その方が気分的にすっきりしているのだ。中小企業診断士が社会貢献業と言い切るのであれば、ベンチャー支援のプライオリティはおのずと低くなってしまおうのである。